

前号作品短評A 〈小野澤〉

●祈る手に蒼いマニキュアやませ吹く

新野祐子

蒼、はくすんだ青のこと。ここでは、マニキュアの色で、祈る手のものでもあるところがポイント。これはアート、七旬目の絵が青木さんのものなら、絵画か、そのなかのものだろうとおもう。やませ（吹く）とあるので、祈る手の、祈りの内容は人事ではなさそうだ。色にはなんらか自由さがあるので、この場面でも、よみどころとなる。山に関係する絵だろうか。

麦茶汲む肉食系の絵を見ては

肉食系の絵だという。大胆なところのある絵だろうか。そこで、そのあとで、麦茶汲む、となる、何か補色関係のような。言葉では、水を汲む、があった。会場に用意してあった麦茶だろうか。一つの納得でもある。

アマリス館長の名は木草さん

木草さん、がいい。だが、こぐさ、では変換しない。変換は、きくさ、だろうか。名前にも不思議に納得するような場面がある。アマリスは眼前か。週番日誌、に木暮先生、を間違つて小暮先

生としていて、受け取ってもらえなかったことを思いだした。（中学生のところ）

●病院に行くたび思ふ愛子さん、愛子さんちの愛想なき猫

布宮慈子

黒白の猫は逃げずにゐるのみに懐くことなし愛子さんちの

病院にいくたびに（もういない）その人のことを思う、というのは、お見舞いにいった記憶から、だろうか。愛子さんちの、ちの、には、ワードで校閲の波線が入った。それでも、愛子さんちの猫、だ。タイトルは「愛子さんの猫」。愛子さんちの、黒白の猫、がくり返された。ち、は家。それは、どうしても愛子さんちの猫。われわれには、過去がある。そこに人がいて、猫もいる。いくらかはよいことのようにもみえるそのこと。それは、いのちのことでもある。

一連後半に名前も出ていて、デイジー。

うしろ二首は、その病院のパーティオ。パーティオの木陰、ベンチで息を吸う。空気感がある。

病院のパーティオ明るくマスク顔に疲れし人がぼつぼつ出で来

やはらかな風吹いてくるベンチにて息を吸ふなりパーティオの木陰

- オリンピックの聖火出発の映像にあやかりていま散歩に出でぬ

市川茂子

巣ごもりの日々で、散歩の意味もより積極的なものになっているが、ここでは何か出発をするような氣息だ。オリンピックの、その年である。けれどもそれは、〈長閑な日々〉にはなっていない。映像がすべてであり、その映像の一つにあやかる、という。また、数多の人がかわってリレーがある。そのリレーにしても無事に着く日待つという。こういう心持ちも作者のものである。

白梅紅梅、桜花の季節でもある。そこに（一連タイトル）「煩惱」をかさねている。

新緑に囲まれながら花のある墓園に通う夫の命日

思いやりあれど差し上げる物なきを「眼施」「心施」と仏典にあり

施す、ということにもいろいろな施し方がある、ことをしる。ひとつの辛さ。一日一日があった。果てのない思い、とそのくり返しであることを、歌は言葉にしている。

前号作品短評B 〈慈子〉

- 思はざる検診結果くつきりと丸く小さき腫瘍を示す

梅津純子

「乳癌」顛末記、という題に驚きながら一連を読んだ。検査結果から、当然のように医師は手術の予定を入れようとする。患者としてはセカンドオピニオンを望むが、コロナ禍で治療が遅れるとの返事。決意して手術を受けた。手術の前も、手術後の病室にあっても心の中は揺れる。

『プレバト』に心泳がせ乳癌の術後三日の病室にあり

ふつうは手術後に傷が癒えていくと同時に、癌への恐怖感が薄れていくはずだ。しかし…。

「癌ではありませんでした」「えッ、そんなッ」腫瘍摘出退院七日後

誤診率数パーセントと告げざりし事を落ち度と医師平然と

細胞診の誤診率が数パーセント、ということか。一読者としても憤りを覚える。だが、現実起きてしまったことだ。納得するまで、医師と向かい合うことはできたのだろうか。

- 越冬の黒豆さを弾け飛ぶ健やかなるはより遠くへと

大橋千佳子

春の喜びと勢いを感じさせる上の句に続き、下の句は豆が弾けていくさまを描写する。健康的な豆は遠くへ弾けていくとの発見は、何かを暗示させるようだ。

なんとまあ「製図を教えてください」と進級前の笑顔の君よ

早春の祖父との別れ語りつつ彼はスプリングコート地を裁つ

裁縫を教える専門学校での出来事か。進級の直前になって製図を教えてください、と悪びれもせずに言ってくる生徒。なんとまあ、とあきれ返るが憎めない。頼んでくるだけマシではないか。次の歌では、春の早い時期に祖父が亡くなったのだろう、生徒は手を動かしながら、なんとなくそのことを伝えたかった。スプリングコートという語が、春への決意を表しているようである。二首並んでいるが、笑顔の君と彼は同一人物かどうかはわからない。

●藤棚の下はベンチのあるところすわってそこは桂木隣り

小野澤繁雄

公園の風景であろう。藤棚の下のベンチに座ってみると、隣には桂の木があった。見たままの描写である。カツラとわかったのは、木の名が表示してあったとも考えられる。

いつもの服というものがあることにしり合いが周回路半周が先

立ち歩き好きの犬にもあいたりきその説明は飼主がして

服で知人とわかり、公園の中を巡る道の半周先にいるのが見える。同じ時間に公園に足を運んでいると、顔見知りになる人がいる。そうすると挨拶くらいはするようになる。面白いものだ。立ち歩きをする珍しい犬にも会ったことがあり、飼主が理由を説明してくれた。日常の見聞きする事柄、そこにも人の意識が見え隠れしている。

●コロナ禍のさなかの天体ショーなれば皆既月蝕目に収めたし

河村郁子

皆既月食（蝕）は太陽と地球と月が一直線に並び、満月が地球の影に完全に覆われる現象。ことしの五月二十六日はスーパームーンと呼ばれる、満月としては一年で最も地球に近づく日で、最も遠くにある満月と比べて見かけの直径が14パーセント大きく見える、ということだった。作者はパソコンとスマホを駆使して、その瞬間を見ようとする。

夕さりと巽たつみの方の空見つめうす雲広がりくるを憂ふ

しまらくを見つめてをれば蝕もどる半月は銀の光にもどる

夕さる（夕方になる）、巽（辰と巳との間。南東）、しまらく（しばらくの古形）など、古語を使い、天体ショーとの違和感を楽しむ。なかなか粋な作りである。